

### 3 水源河川におけるモニタリング調査手法の構築

#### [総合評価]

水源河川水質は、県民の健康影響にも直結する可能性のある要因であり、行政上の重要性の高い課題であることから、本研究課題の重要性は高い。

これまで4年間の研究で、既にある程度の成果が上がっていると認められるが、経年変化の把握については目に見える結果が出ているのに対して、指標生物の選定はまだ残作業がかなりあるようなので、最終年度に人的資源を投入する必要があるように思われる。

指標生物を利用した水質の評価が主たる形態と理解できるが、化学的な水質データとどのような関連があるのかについても、もう少し詳細な分析があったほうがよいと思われる。

学会発表は是非進められたい。

自然の変化を追う研究であり、長期間継続することに意義の有るテーマである。行政施策や市民参加と連動しながら長く研究を継続されている点については敬意を表する。

他方、第2期に入っていることもあり、中間的な研究成果であっても毎年外に向かって発信するように努力することも大事である。統計解析の結果については、解析アドバイザーと連携しつつ、最終年度に向けて発表の準備をしてほしい。

河川環境を「見える化」する指標生物を探索するという目的に対して、いくつかの手法を検討され、指標生物の提案まで実施されている。5年毎の生物関連調査を基にされていることから、今後の調査により、さらに精度の高いものとなることが期待される。水質データと生物について、周辺環境の変化なども確認しながら、今後も長期の検討を行うことが望まれる。

河川環境の調査は緊急課題というわけではないが、継続的かつ県民参加型の調査は環境教育的な点でも価値がある。

水行政への政策展開という観点からは、具体的な方向性が示されていない。浄化槽整備の効果を評価し、浄化槽整備を促進するという方向性であるならば、河川への汚染物質の排出情報も充実が必要ではないか。

研究成果の発表実績や県民参加による環境意識向上の効果が不明である。学会等への発表の他、本研究への県民調査への参加依頼などの機会などもとらえ、水生生物調査、水質保全の意義を県民に伝える手段としても活用すべきである。

新たな生物指標の開発については、例えば、気候変動の影響評価の方が砂堆積の指標よりもニーズがあるのではないか。

#### [数値的評価]

評価内容	評価項目	評点				
		5	4	3	2	1
課題設定の妥当性	背景と必要性	1人	2人	1人		
	優先性	1人	3人			
計画の立案と実施方法	研究内容	2人	1人	1人		
	計画の妥当性		2人	2人		
研究の進捗状況	進捗状況	1人	1人	2人		
成果の展開と普及	目標の達成度		3人	1人		
	具体的な成果		1人	2人	1人	
	成果の発展性	1人	2人	1人		

5点満点(標準3点)の評点で5~1点の絶対評価